York : The Macmillan Co., 1955), p. 220.

64) Herbert Wender, "German Historiography in the Second Half of the Nineteenth Century," *The Development of Historiography,* ed. by M. A. Fitzsimons (New York : Kennikat Press, Inc., 1954), p. 213.

65) W. W. Barnes, *The Southern Baptist Convention 1845-1953* (Nashville : Broadman Press, 1954), p. 183.

66) Patterson, *Baptist Successionism : A Critical View,* p. 29.

41) G. A. Lofton, *Defense of the Jessey Records and Kiffin Manuscript* (Nashville : Chas. T. Dearing, 1899), p.v.

42) *Ibid.*

43) *Ibid.*, p. 27.

44) G. A. Lofton, *A Review of the Question* (Nashville : University Press Co., 1897), pp. 3-4.

45) Robert G. Hanley, "Henry Clay Vedder : Conservative Evangelical to Evangelical Liberal," *Foundation,* V (April, 1962), 135-136.

46) "Vedder, Henry Clay," *Who was Who in America* (Chicago : The A. N. Marguis Co., 1942), I, 1276.

47) *Ibid.*

48) G. Keith Parker, "Henry Clay Vedder; Church Historian," *The Quarterly Review* (October-December, 1970), pp. 74-75.

49) Hanley, *op. cit.*, pp. 134-144.

50) H. C. Vedder, *Baptists and Liberty of Conscience* (Cincinati : J. R. Baunes, 1884), p. 3.

51) *Ibid.*, p. 40.

52) H. C. Vedder, *A Short History of the Baptists* (Philadelphia : American Baptists Publishing Society, 1891), p. 5.

53) *Ibid.* (1907), p.vii.

54) Fredrick Eby, "A. H. Newman," *Southwestern Man and His Message* ed. by J. M. Price (Kansas City : Central Seminary Press, 1948), pp. 87-88.

55) Fredrick Eby, "Newman, Albert Henry," *Encyclopedia of Southern Baptists,* II, 977.

56) *Ibid.*

57) A. H. Newman, *A History of the Baptist Churches in the United States* (6th ed., New York : Charles Scribner's Sons, 1915), pp. 1-4.

58) *Ibid.*, pp. 4-27.

59) A. H. Newman, *A Century of Baptist Achievement* (Philadelphia : American Baptist Publishing Society, 1901).

60) Fredrick Eby, *Newman the Church Historian* (Nashville : Broadman Press, 1946), p. 80.

61) A. H. Newman, "The Whitsitt Controvery", *A Review of the Question* (ed. George A. Lofton, Nashville : University Press Co., 1897), p. 185.

62) F. Eby, *op. cit.*, p. 155.

63) H. C. Hockett, *The Critical Method in Historical Research and Writing* (New

Expositor, LI (October, 1954), 449.

17) Dobbins, *loc. cit.*

18) Carver, *op. cit.*, p. 457.

19) E. B. Pollard, "The Life and Work of William Heth Whitsitt," *The Review & Expositor,* IX (April, 1912), 162-163.

20) *Ibid.*, p. 173.

21) James T. Meigs, "The Whitsitt Controversy", *The Quarterly Review* (January-March, 1971), p. 45.

22) Carver, *op. cit.*, p. 465.

23) William Heth Whitsitt, *A Question in Baptist History* (Lovisville, Ky., Chas. T. Deering, 1896), p. 10.

24) *Ibid.*, pp. 80-90.尚，「ジェシーの記録」と「キッフィン原稿」に関する詳細な研究は，拙著『バプテスト教会の起源と問題』の第二部「パティキュラー・バプテスト派の起源と問題点」の第5章「『ジェシーの記録』および『キッフィン原稿』の研究～P.プテスト派の起源を語る原資料への一考察～」371-400頁の中でなされている。

25) *Ibid.*, p. 92.

26) Dobbins., *loc. cit.*

27) Pollard, *op. cit.*, pp. 177-179.

28) Carver, *op. cit.*, pp. 467-468.

29) "Christian, John Taylor", *Who Was Who in America,* I, 218.

30) John T. Christian, *Did they Dip?* (Louisuille, Ky. : Baptist Book Concern, 1896) 参照。

31) *Ibid.*, p. 7.

32) *Ibid.*, pp. 7-8.

33) ジョンT・クリスチャン著『バプテスト教会史』（天利信司，上山雄治共訳，バプテスト文書刊行会，1979年）参照。

34)『上掲書』442頁。

35)『同掲書』477-538頁。

36) Harold Stephens, "Lofton, George Augustus," *Encyclopedia of Southorn Baptists,* II, 790.

37) G. A. Lofton, *English Baptist Reformation* (Louisuille : Chas. T. Dearing, 1899), p. v.

38) *Ibid.*, p.vi.

39) *Ibid.*

40) *Ibid.*, p.viii.

五つのしるし（mark）があるという。第1は教会が神によって成ったものか，或は人によって成ったものかという判別のしるしが伴うと強調する。グレイヴスにとってはバプテスト教会以外のカトリック教会，プロテスタント諸教会は全て人によって成ったという偏見的独断によって否定されてしまう（pp. 26-27）。

第2のしるしは目に見える教会である。従って，カトリックやプロテスタント諸教会がもつ普遍的な目に見えない教会観（時間と空間を超えて一つとなるキリストの教会という理解）は当然ながら否定される（pp. 27-28）。

第3は教会の存在する位置は地上であるという地域性に限定するしるしである（Its locality is upon the earth）（pp. 28-29）。

第4は地上に限定された教会は各個の地方教会という形を取るという主張となる。この地方教会こそ聖書の示すモデル教会であり，この教会にキリストは①福音宣教，②奉仕的役員の選出，③教会員の訓練，④バプテスマと主の晩餐式の執行，を委託された（pp. 30-40）と考える。第5のしるしは霊的会員制である。これはバプテスマを受ける前に聖霊の恵みによって魂の新生体験をし，信仰告白をした者のみが教会の構成メンバーとなることができるという主張である。ゆえに幼児へのバプテスマは否定される（pp. 41-47）。

グレイヴスにとってランドマーク主義とは真実に聖書的教会を形成する運動であり，五つのしるしを満たしてきた聖書的教会は原始教会以来継続して存在したと考える。その教会こそ聖霊によって新生し，自覚的救いの体験に基づいて信仰告白をした者によって構成された教会であり，それゆえに自覚的信仰をもたない幼児へのバプテスマを否定したゆえに，異端的存在として排除された歴史上の諸セクトこそ（G.H.オーチャードによって明らかにされたゆえに）聖書的教会と言えるのであり，聖書の説く真実はこれらのセクトを通して継承され，バプテスト派にまで至ったと考えたのである。グレイヴスにとってバプテスト継承説と教会論とが密接なロジックの中で説かれていることは明白である。

11) S. H. Ford, *The Origin of the Baptists* (Nashville : Southwestern Publishing House, 1860), p. 7.

12) *The Oxford Dictionary of the Christian Church* (Oxford : Oxford University Press, 1978), p. 1053.

13) D. B. Ray, *Baptist Succession : A Handbook of Baptist History* (Cincinati : G. E. Stevens & Co., 1870), p. iii.

14) *Ibid.*, pp. 443-444.

15) Gaines S. Dobbins, "Whitsitt, Willian Heth," *Encyclopedia of Southern Baptists*, II, 1496.

16) W. O. Carver, "William Heth Whitsitt : The Seminary's Martyr," *The Review &*

紀初頭に入り，〔フィトシットの〕新しい見解は静かにまた確実に力を得ていった。……学問的に訓練された歴史家たちは精妙に構築されたように思われたバプテスト継承主義を拒絶するようになっていったのである[66]。

註

1）斎藤剛毅「アメリカ宗教の底流に在るもの（Ⅰ）～第1次から第3次信仰大復興の研究と分析～」（福岡女学院大学人文学研究所紀要『人文学研究』№1，1998年3月），pp. 143-166の中で，第1次と第2次信仰復興の定義，歴史的背景，様相，分析を述べているので参照を乞う。

2）Robert G. Torbet, *A History of the Baptists* (Chicago : The Judson Press, revised ed., 1965), pp. 298-381.

3）W. Morgan Patterson, *Baptist Successionism : A Critical View* (Valley Forge : The Judson Press, 1969), p. 22.

4）W. Morgan Patterson, "The Development of the Baptist Successionist Formula", *Foundation,* V (October, 1962), 340.レオポルド・フォン・ランケ（1795-1886）はドイツの歴史家であり，1825年から死に至るまでベルリンで歴史学教授として教えた。ランケの功績は歴史に対して客観的態度で臨み，第1次原資料を優先的に重んじることを強張したことにある（"Ranke, Leopold von", *The Oxford Dictionary of the Christian Church,* p. 1158参照）。

5）Thomas Crosbyに関しては，拙著『バプテスト教会の起源と問題』（ヨルダン社，1996年），26-27頁に；Robert Robinsonに関しては『同掲書』，28-29頁に研究の一端が記述されている。

6）Patterson, "The Development of the Baptist Successionist Formula", p. 341.

7）G. H. Orchard, *A History of Foreign Baptists* (*Lepington : Ashland Avenue Baptist Church, 1956*) 参照。

8）*Patterson, Baptist Successionism : A Critical View,* p. 25.

9）斎藤剛毅『バプテスト教会の起源と問題』の54-55頁に書いたランドマーク主義に関する註の文章を参照。

10）Patterson, *op. cit.,* p. 27.ここでパターソン教授が述べるランドマーク主義を提唱したグレイヴスの教会論について考察しておかなければならない。彼の教会論はJ. R. Graves, *Old Landmarkism : What is it?* (Calvary Baptist Church : Ashland, Kentucky, 1880) の中に展開されている。グレイヴスは聖書が示す模範となる教会には

来るようになった。前世紀より記述方法が改善されてゆき，よりぼう大な原資料の入手が可能となった。H. C. Hockett は19世紀の歴史家たちの文献扱いについて「〔19世紀の歴史家たちは〕真実を求めて客観的に記述し，教派根性を拒絶するようになった。……彼らは引用文に接した時，原本と同じ正確な形を好んだが，権威ある人々による引用に関しては，同様の態度で臨む努力に欠けていた」[63]と書いている。

S.H.フォードとD.B.レイの著作を分析した結果，彼らの著書は19世紀の歴史書よりも18世紀の歴史書に近いことが明らかになった。J.T.クリスチャンも19世紀の歴史家であったが，ホケットが指摘しているように，彼は原資料からの引用文が正確になされているかどうかを厳密に調査・検討していない弱点を露呈させている。

19世紀の中頃迄にヨーロッパ大陸の学者たちの間にランケの歴史記述における方法論が浸透してゆき，彼の教えを受けた弟子たちは大きな学問的業績を築き上げていったのである[64]。フィトシットはドイツで歴史記述の学問的方法論を学び，それをバプテスト派の起源に関する研究に適用して著述し，その結果論争を惹き起した。バプテスト継承説の立場に立つ学者やランドマーク主義者たちはフィトシットの学説を信憑性を欠くものとして批判したが，彼らがどんなに非難しても歴史の潮流を変えることはできなかった。ロフトンは歴史的文献を学問的方法論でフィトシットの正しさを立証した。ヴェダーとニューマンは「キッフィン原稿」と「ジェシーの記録」に歴史的信頼性を認めて，彼らはバプテスト派の起源を書くに際して，フィトシットの発見を基盤に書き上げている。従って，「ランドマーク主義は戦場で勝ったように見えたが，戦争には負けた」[65]のである。南部バプテスト神学校の元教会史教授W.M.パターソンの言葉をもってこの研究をしめくくりたい。

> フィトシットのバプテストの起源に関する見解に反対した人々は彼に圧力を加え，辞任へと追い込んだことで充分な力を発揮することに成功したが，彼らは彼の発見とその影響力まで押さえ込んでしまうことはできなかった。20世

スト出版会が100年記念出版物として企画したものである[59]。この書の貢献に関してフレデリック・エディは次のように述べている。

> バプテスト派の息吹と活動，バプテスト教会の信仰的条件，世界の国々への宣教活動の拡大などが総括的に概観され，巧みに述べられているこの書は，〔アメリカの〕バプテスト派の人々に初めて世界におけるバプテスト派の役割という意識を覚醒させ，……それが1905年英国ロンドンにおける世界バプテスト連盟の形成へと導いていったのである[60]。

1890年代にニューマンは二つの大切な論文を書いている。一つは *Christian Literature* (1891) に記載された「ロジャー・ウィリアムズ」であり，もう一つは1897年にG.A.ロフトンによって編集された *A Review of the Question* に「フィトシット論争」を書いたことである。ニューマンは「浸礼が英国バプテスト派に導入されたのは1641年であったという確信に達した」[61]と述べて，フィトシットの論説を支持した。ニューマンは歴史学者として多作家であったが，彼の見解は温健な保守的立場であるという印象を与えている。F.エディはニューマンの意義を次のように述べている。

> 私がニューマン博士を1891年に知るようになった時，彼は理想を求める精神の持ち主であった。彼は意識的に根本的に掘り下げてゆかねばならないと感じていたバプテスト原理を書き上げたバプテストであり，それは『幼児洗礼反対の歴史』(*A History of Antipedobaptism,* 1878) として結実した。またこの国及び全ての人々に偉大な事業を成し遂げて奉仕した人，即ち信教の自由を実現させた有能なチャンピオン，ロジャー・ウィリアムズを世に知らしめたのがニューマンであった[62]。

結　語

19世紀の歴史家たちは18世紀の歴史家たちよりも良い条件の下で仕事が出

29）で教え，1933年に永眠している[55]。

ニューマンの著作は *A History of Baptist Churches in the United States* (1874，改訂版1915)，*A History of Antipedobaptism* (1878)，*A Manual of Church History* (Vol. I, 1899; Vol. II, 1902; 改訂版1931)，*A Century of Baptist Achievement* (1901) などがある。彼は100篇を超える論文や記事を学術雑誌や宗教関係雑誌に記載している[56]。

(2) ニューマンの著作分析

アメリカ教会史協会がアメリカにおけるプロテスタント教派の歴史シリーズを企画した時に，ニューマンが著作を依頼されて書いたのが **A History of the Baptist Churches in the United States** である。この書物を読むと読者はフィトシットやヴェダーなどバプテスト派の歴史家たちの間に次第に浸透していった第1次原資料を重んじて歴史的事実を書くという姿勢を感じる。ニューマンは教派的偏見から全く自由であったとは言えないが，それ以前に書かれたバプテスト派の歴史書よりも原資料を用いて正確な歴史事実を書こうと努力したことは確かである。

ニューマンはこの書において，バプテスト派の五つの特色を指摘している。それらは(1)信仰と実践の規範としての聖書の絶対的権威，(2)幼児洗礼（バプテスマ）の否定，(3)新生した信者が構成する教会，(4)良心の完全な自由の提唱，(5)浸礼の重視などの主張である[57]。これらの主張原理こそ原始教会の使徒たちが主張したものであり，バプテスト教会はその重要な規準に従ってきたとニューマンは判断したのである。そして，バプテスト派は厳密にいって1609年以前に存在しないが，幼児洗礼反対派とバプテスト派との間には精神的類似性が存在すると考えた[58]。

序論のあとニューマンはバプテスト史を三つの時期に分ける。アメリカにおける最初のバプテスト教会形成から信仰大復興（1639-1740）までの時期；信仰復興から三年に一度のバプテスト派総会が開かれるようになった年（1740-1814）までの時期；それ以降の1914年までの時期である。

A Century of Baptist Achievement この書は1901年にアメリカ・バプテ

る。この歴史書の特色は教派的弁護のために教説を守り通そうとするのではなく，事実に即して記述してゆく方法であり，その方法に従って第一部は新約聖書の規範の歴史的概観であり，そこにバプテスト派が教理と教会政治の基盤を置いていることを語るのである。次にこの新約教会がどのようにして数世紀間にカトリック教会へと変形して行ったか，その足跡をたどり，やがて福音主義的教会が次第に圧迫を受けてゆくようになったことを語る。その一つである再洗礼派は幼児洗礼が原始教会の実践でなかったことを主張し，信仰告白に基づくバプテスマを主張したが，その様式は滴礼或は灌水礼であったことを述べる。

第二部はバプテスト教会の歴史的記述に費され，歴史的資料に基づいて書かれている。ヴェダーはバプテスト教会の起源を17世紀以前にさかのぼらせることは非科学的であると主張する。従ってヴェダーのバプテスト史に関する記述方法は科学的批判精神に基づく歴史探求であると言えるであろう。1641年の浸礼の実践に関しては，ヴェダーはフィトシットの名を述べることなく事実だけを指摘する。

2．Albert Henry Newman (1852-1933)

(1) A.H.ニューマン略伝

A. H. Newman は1852年南カロライナ州のエッジフィールに生れている。彼は17歳でマーサー大学の３年生になり，19歳を迎える数ケ月前に優秀な成績で大学を卒業している。1872年にロチェスター神学校に入り，ヘブル語と旧約解釈学を専攻し，75年５月卒業後は南部バプテスト神学校に移ってヘブル語と新約聖書ギリシャ語を専攻。1876年の秋，ロチェスター神学校に招かれて，教会史教授に就任した。1881年にトロントのバプテスト大学〔後のマックマスター大学〕に移って1901年迄教えている。その間に彼はギリシャ語，ラテン語，ドイツ語の語学力を活かして教会史の学びを深めた[54]。それからニューマンはベイラー大学 (1901-07)，サウスウェスタン神学校 (1907-13)，ベイラー大学 (1913-21)，マーサー大学 (1921-27)，マックマスター大学 (1927-

きもの」[50]と書いている。

第一論文では，全ての人に対する良心の自由に関する教理の歴史をヘンリー八世の統治の時代から1643年のバプテスト派による信仰告白の公表迄を研究し，第二論文では1644年から1689年（名誉革命の年）の間に，この教理を毅然と主張し続けた英国バプテスト達を記述している。ヴェダーは「全ての人への信教の自由を最初に主張したのはバプテストであり，しかも決してその主張を休止することなく歴史にその論旨を留(とど)めたのはバプテスト達の光栄である」[51]と述べている。第三論文は，長老派と独立派の反対の立場が述べられている。

A Short Baptist History of the Baptists 1891年に初版が出されたこの書はヴェダーの著作の中で最も多くの人々から読まれたものである。その理由は学問的正確さを保ちながら，読者を引きつける文体で，しかも抵抗を感じる程の厚さではなく，低所得の人々にも手の届く価格でもあったからである。

この書は16章から成っており，原始教会，迫害された教会，福音主義的教会の三部構成である。バプテスト継承説を批判して，ヴェダーは「真実の信仰の継承はさかのぼることもできるだろう。……しかし，継承説は学徒を誤謬の泥沼へと導き，非学問的事実による歪(わい)曲という苦境に追い込む」[52]と述べている。

第3版の序文の中で，著書内容の進展について語る。第1版が売り切れた後に，「1896年の火事で手元にあった蔵書が全て灰塵に帰してしまった」ので二種類のバプテスト史を書くことになったこと。「一種類は低価格の小さな書物を，もう一種類は挿し絵を入れたより厚い書物であり」，前著は1897年に旧著より新しい事を盛り込んで出版し，後著は「全般に亙り細心の注意を払って再検討し，外国へも旅をし，ぼう大な資料を集収し」1907年に出版した[53]。

この1907年度版は1960年に至るまでバプテスト史を扱った古典的な良書となって神学校のテキストとして用いられた。この書は二部構成になっており，第一は「バプテスト派原理の歴史」，第二は「バプテスト教会の歴史」であ

Baptists of the Middle States, 1898; *The Baptists,* 1903; *Balthazar Hubmier,* 1906; *A Short History of Baptists,* 1907; *Christian Epoch Makers,* 1907; *Our New Testament-Where Did We get it?,* 1908; *Church History Handbooks* (vol. I-IV), 1909; *Socialism and Ethics of Jesus,* 1912; *The Reformation in Germany,* 1913; *The Gospel of Jesus and the Problem of Democracy,* 1914; *The Johannine Writings and Johannine Problem,* 1917; *The Fundamentals of Christianity,* 1921; *A Short History of Baptist Missions,* 1927. 彼は他に雑誌，新聞，百科事典など多くの記事を書いている[47]。

ヴェダーの著書内容を年代的に追って検討してゆくと，彼の思索と興味に変化が生じていることが分る。最初の25年間ヴェダーは主として教派の機関誌においてバプテスト派に関する歴史的著作は正統的立場で書いていたので，バプテスト批評家たちから賞讃的に評価されていた。しかし，次の25年間においてヴェダーの関心は社会主義の方向に傾いてゆき，著述や新約聖書研究の成果も批判と論争を呼び起したのである。唯一の例外は *A Short History of Baptist Missions* (1927) であった[48]。

Robert B. Hanley によれば，ヴェダーは個人的敬虔な信仰から出現しつつあった大都市社会における信仰へと移行したと評価する。即ち，ヴェダーは1984年にクローザー神学校の歴史家としての経歴から始まり，現代プロテスタントの伝統的潮流に乗った一人のバプテスト派教師として正統的信仰に立っていたが，1913年頃から彼の見解が変り始め，進化論，マルクス主義経済学及びその歴史観，実証主義哲学などの影響を受けて変化が生じたとR. B. ヘンリーは考えるのである[49]。

(2) ヴェダーの著作分析

Baptists and Liberty of Conscience この書はヴェダーが *Baptist Quarterly Review* に1884年に連載した三論文をまとめて一冊の歴史的著作としたものである。この中でヴェダーは英国のバプテストたちが良心の自由のためにいかに闘ったか，その経緯を短く描写しており，それは「信仰的先輩の栄光である。そしてバプテスト信者たちが歴史に対して新しい関心を寄せるべ

ト史を書き上げた。ヴェダーは保守的な立場からリベラルな傾向に変る前に *A Short History of the Baptists* を書いている。ニューマンもまた *A History of the Baptist Churches in the United States* を正統的歴史視点から書き上げている。二人の著作はそれぞれ構成は異っているが，両書共に近代バプテスト派が原始教会，中世の反幼児洗礼反対派，そしてヨーロッパ大陸の再洗礼派と精神的類似性をもっていることを肯定している。両著共に「ジェシーの記録」と「キッフィン原稿」を信憑性ある資料として用いている。共に歴史的記述において現代の歴史科学的手法を用いているが，教派的偏見から完全に自由であったとは言えない面も持っている。

1．Henry Clay Vedder (1853-1953)

(1) H.C.ヴェダー略伝

H.C.ヴェダーは1853年2月にニューヨーク州北部の村デルイターで生れている。幼少年時代に暫々伝道者たちが家庭を訪れていたので，宗教的雰囲気の中で育ち，また彼らからの影響も受けていた。1869年に16歳の時にロチェスター大学に入学し，1873年に卒業後，同大学の神学部に進み，神学士号を，又1876年には文学修士号を得ている[45]。

神学部を卒業後ニューヨークに出て，1876年から92年までバプテスト系新聞 *The Examinar* の編集者の一人として働いた。この仕事の傍ら，学術雑誌 *Baptist Quarterly Review* の編集者として1885年-92年務めている。1894年にはペンシルヴァニア州チェスターにあるクローザー神学校で教会史教授になり，1926年に定年退職する迄教えている。1929年にはジャーナリストとしての才能を活かして世俗的新聞 *Chester Times* の編集者として働き，1935年10月13日に永眠している[46]。

ヴェダーは多くの著作をなしていて，それらを列挙すると，*Baptists and Liberty of Conscience,* 1884; *A Short History of Baptists,* 1891; *The Dawn of Christianity,* 1894; *American Writers of Today,* 1895; *Talks to Baptist Young People,* 1895; *A Short History of Baptists,* 1897; *A History of the*

洗礼派，英国の再洗礼派，英国のアルミニウス主義バプテスト派，カルヴァン主義バプテスト派，「ジェシーの記録」，フィトシット博士の論点，論争の効果，歴史家クロスビーの問題などを述べている。序文の中で，ロフトンは次のように記述する。

> この書の目的はフィトシットが既に確立したことを肯定し，強化することにある。筆者はバプテスト史全体を忠実にたどろうとしたばかりではなく，この書の一部をなす〔トマス・〕クロスビーの章を扱う際，問題解決の鍵を見出したことに満足を覚えるものである。そして，そのことに関してはエバンス，グールド，そして他の著者たちもジェシーの記録とキッフィンその他の資料が1641年こそ英国バプテストが信仰者バプテスマとしての浸礼を回復した年であることを確定しているのである。それはフィトシット博士によって発表され，主張されたものであった。クロスビー，エヴァンズ，ニューマン，ヴェダー，バーレイジ，グールドその他の信頼に価するバプテストの歴史家たちは皆，この問題と疑問に関してはフィトシット博士の味方なのである[44]。

上述したロフトンの著書三冊を注意深く読むと，論争の本質的問題に対する鋭い洞察と事実に裏づけられた真理性の確立に意欲を燃やして，フィトシットの立場を弁護しなければならないという強い責任感とジョン・クリスチャンに対する対抗的闘争精神が感じ取られる。A.H.ニューマンやH.C.ヴェダーはフィトシットに対する特別の称賛なしに独自の歴史的視点に立とうとしたが，ロフトンはフィトシットへの攻撃批判者たちと敢えて対決し，彼らのどの点が間違っており，非歴史的であるかを立証しようとしたのである。ロフトンの明解で説得的な文章はフィトシットの主張の信頼性を高めるのに役立ったという意味で，その貢献度は評価されるべきであろう。

III. Henry Clay Vedder と Albert Henry Newman

19世紀の後半期にH.C.ヴェダーとA.H.ニューマンが総括的なバプテス

くに起源をもつのではない。……（P. 40）[42]

ロフトンはジョージ・グールドが筆写させた「キッフィン原稿」とトマス・クロスビーが『イギリス・バプテスト教会史』（全4巻，1738-42年）の執筆で用いた「キッフィン原稿」を慎重に調べて，「キッフィン原稿」の歴史的信憑性の高いことを以下のようにまとめている。

ここに私はグールドとクロスビーが用いた文献を比較することにより，両者が同一のものではなく，単に似ているだけであるとJ.T.クリスチャンが述べることに対して，知的で公平な見解をもつ読者に訴えかけ，〔二人が用いた〕両資料が同一に示していることを特に明白にしたいと思う。

1．ジェシーの教会が1640年に二つに分れたことは同じである。
2．ブラントと彼の仲間たちが到達した確信—クロスビーが述べる「幾人かの真面目な人々」—即ち，コロサイ12：12，ローマ6：4に基づく浸礼の正しさに関する確信は同じである。
3．それに続く祈りとどのようにして浸礼を現実化して共に喜ぶかという協議がなされたことは同じである。
4．浸礼という礼典がイングランドでは伝統的に正しく行われてきていないと判断したことは同じである。
5．オランダ語を話すことができるブラントがオランダに委任の手紙と共に派遣され，オランダの教会で受け入れられ，バッテ〔ン〕によってバプテスマを受けて帰国し，ブラックロックにバプテスマを授け，二人が残りの者にバプテスマを授けたことも同じである。
6．53名が浸礼を受けたという記述も同じである[43]。

J.T.クリスチャンが文献中のある特定の個所の相違矛盾点を強調したのに対して，ロフトンは文献内容が重要な諸点において一致している所に注目し，文献が同一のものであることを立証しようとしたのである。

A Review of the Question (1898)　この書はロフトンによって編集され，G. A. Lofton, H. C. Vedder，そしてA. H. Newmanによって書かれた三部から構成されている。ロフトンは10項目を書き，その中で1500年までの再

をも参考にして書かれていることは事実である。

Difense of Jessey Records and Kiffin Manuscript (1899)　この書はクリスチャンの *Baptist History Vindicated* に特別な注意を払って吟味し，批判を加えたものであるゆえに，ロフトンの *English Baptist Reformation* の追加的性格をもつものである[40]。従ってロフトンはJ.T.クリスチャンがいかに偏見と一方的な見方に毒されて記述しているかを露呈させる。ロフトンの意図は次の文章からも明白に読み取られる。

> 筆者は思想の自由における進展の中で未来の世代の人々が，今擁護されるべきと主張されているバプテスト史の問題を正しく読み取り，真実を認識するであろうと意識している。筆者が読む限りでは〔J.T.クリスチャンの論述は〕殆どゆがめれてしまっている[41]。

そして具体的に『キッフィン原稿』に関するJ.T.クリスチャンの偏見的記述が，どのようになされているかを下記のように列挙する。

> 「キッフィン原稿」の歴史的価値に関する異常なまでも誇張された主張が押し出されてきている。…… (P. 6)
>
> 〔歴史家〕クロスビーが用いた資料とグールドが用いた資料が広範囲に亙って異っているので，両者は同じ資料ではありえない。しかし，両者は共に「キッフィン原稿」と呼ばれている。…… (P. 7)
>
> グールド文献はオリジナルではなく，オリジナルのコピーと言えるのであろうか。せいぜいコピーのコピーでしかなく，しかもオリジナルの大部分は現存していないのである。…… (P. 9)
>
> グールドが書き留めた現在の形における「キッフィン原稿」は17世紀の文献ではないことは読んでみれば明らかである。もし，主張されているようにコピー〔筆写〕の作業が1712年になされたとしても，その筆者はオリジナルに従ったのではなく，筆写した者の時代の形式と筆記体が導入されてしまっている。…… (P. 10)
>
> これらの全てが示すように，「キッフィン原稿」は真実なものとは言えない。英国のバプテストは1641年に始まったのでも，1633年でもなく，この年代の近

り，バプテスト派では優れた論争家でもあった。宗教関係の雑誌に多くの記事を書き，また次のような著作を多くなしている。*The Baptist Trophy : A Centenial Poem on Religious Liberty* (1876), *Character Sketches* (1890), *Harps of Life* (1896), *A Review of the Question* (1897), *Review of Dr. Jesse B. Thomas on Whitsitt Question* (1897), *English Baptist Reformation* (1899), *Defense of Jessey Records and Kiffin Manuscript* (1899)，そして *Why the Baptist Name* (1912) である。

(2) G.A.ロフトンの著作分析

English Baptist Reformation (1899) この著書は1609年から1641年の間のバプテスト派の歴史を取り扱ったものである。この期間はアングロサクソン系バプテスト教会の形成期であったゆえに，そして彼らは明らかに教派的起源をなす「改革的」運動を展開したゆえに Reformation (改革) という言葉が用いられたのである[37]。

ロフトンは1609年から41年の間におけるイングランドのアナバプテストと呼ばれたグループは信仰者のバプテスマという信念に基づいた分離派というべき人たちであり，彼らが初めて浸礼を実践したのは1641年であったと述べるのであるが，ロフトンはこの著作は「フィトシットが投げかけた問題点」に負うところが多く，フィトシット博士が提起した資料に基づいて生れたものと述べている[38]。更に彼が語るには

> この著作はフィトシット博士の「1641年説」に追加すべきものは何もない。この著作はこの説を支持することを目的としている。英国のバプテストたちが1641年に浸礼を始めたという事実を，偏見をもつことのない学者たちが受け入れるようになるのは時間だけの問題である。……この書のかなりの部分はフィトシット博士の見解を弁護するために書かれている[39]。

このように述べながらも，彼の著作は A. H. Newman の *A History of Anabaptism* と Henry C. Vedder の *A Short History of Baptists* (改訂版)

密に組み立てられた論述内容は逆に切り崩されてしまうのである。

A History of the Baptists 1922年に公けにされた第1巻は日本ではバプテスト文書刊行会から天利信司・上山雄治共訳により1979年に出版されている。この書は新約聖書の原始教会から書き始めてアメリカ・バプテスト教会の起源に迄至るのであるが，著者クリスチャンは反カトリック・グループにバプテスト派との精神的類似性を見出して，モンタヌス派，ノヴァティアヌス派，ドナトゥス派，パウロ派，ワルドー派，大陸アナバプテスト派，英国バプテスト派に幼児洗礼反対と自覚的信仰に基づく浸礼において，歴史的連続性と継承性を見ることによって，ランドマーク主義陣営に固く立つ歴史家であったことを示している[33]。そして，「歴史家たちの圧倒的多数は，〔ジョン〕スマイスが浸礼以外の方法でバプテスマを受けたとは言わないのである」[34]と断言し，カルヴィン主義バプテストの起源に関しても，『キッフィン原稿』と『ジェシーの記録』に充分な注意を払って記述するのであるが，1641年に始まる浸礼の事実を，文献そのものへの懐疑ゆえに軽視し，第2次間接資料の方を重視してしまい，イングランドでは17世紀中頃までは浸礼は一般的であったと結論づけてゆくのである[35]。

3．George Augustus Lofton (1839-1914)

(1) G.A.ロフトン略伝

G.A.ロフトンは1839年にミシシッピー州のパノラ郡に生れ，ジョージア州のマーサー大学で教育を受け(1859-61)，その後連邦軍兵士として4年間兵役義務に服している。それからジョージア州のWade Academyの校長となり，67年には弁護士の免許を取っている。68年にバプテスト派の牧師として按手礼を受けた後，テネシー州のバプテスト教会の牧師となり(1872-77)，それからミゾーリー州(1877-84)，アラバマ州(1885-87)，テネシー州(1888-1914)で伝道牧会に従事している[36]。

1871年にマーサー大学から修士号を得て，その後三つの名誉学位を得ている。彼はいくつかの教派大学の理事を務め，有弁な説教者としても有名であ

ート・バークレー（Robert Barcley）が *Inner Life of the Religious Society of the Commonwealth* (1876) の中で類似したことを論じ紹介しているからである。(2)イングランドのアナバプテスト派が〔フィトシットが指摘する〕滴礼を実践していたという証拠が存在しない。(3)イングランドのアナバプテストたちは1641年以前に浸礼を実践していた。(4)大陸のアナバプテストたち，即ちグレーベル，バルタザール，フブマイヤー，ハンス・デンク，ハンス・フート，メノー・シモンズなどは浸礼を実践していた。(5)英国バプテスト派はジョン・スマイスから始まったのではない。(6)『キッフィン原稿』と『ジェシーの記録』は信じるに足りない。(7)リチャード・ブラントがオランダに派遣されて，真実な継承としてのバプテスマを受けて帰り，ブラックロックに浸礼を授けたとあるが，彼ら二人の名前はその後現われて来ないし，1644年の「ロンドン信仰告白」の代表者署名の中にもその名前が見出せない。(8)ロジャー・ウィリアムズは浸礼を受けたはずである[30]。

クリスチャンは20年以上を費して浸礼の歴史を研究して集収した多くの資料を駆使してこの書の中で論述を展開していることは事実である[31]。イートン（T. T. Eaton）も序の中でクリスチャンの著作がいかに正確で，信頼性に富むものであるかを強調しているが[32]，筆者が検討した限りでは，第1次原資料を一部用いようとする努力が見られるが，余りにも多くの第2次間接資料からの引用が多く，その事実が皮肉にも彼の主張している正確さと信頼性を結果的に損ってしまっているのである。特に(3)，(4)，(5)，(6)，(7)に関する論述は，歴史的事実に即して述べられているのではなく，バプテスト継承説を前提とする偏見から生じた記述なのである。

Baptist History Vindicated　クリスチャンは『キッフィン原稿』と『ジェシーの記録』がイングランドにおいてバプテスト派が実践した事実を語っている重要な資料であるゆえに，二つの資料を詳細に調べて「バプテスト継承説」を弁護するために著述し，1897年に出版したのがこの書である。この書はフィトシットの新説に疑いの目を向けさせることに成功しているように思われるが，後述する G. A. Lofton の反論的著作によって，クリスチャンの綿

ミシシッピー州のテウペロ教会 (1877-78)，サルディス教会 (1878-83)，テネシー州のチャタヌーガ教会(1883-86)，ルイヴィルのイースト教会(1892-1900)の牧師を経験している。

ルイヴィル時代に彼は特に「フィトシット論争」に深く関わり，英国バプテスト派の起源に関するフィトシットの理論に対する代表的反対者として頭角を表わした。論争後クリスチャンはシカゴ (1900-04)，リトゥルロック (1904-10)，アーカンサス (1910-13)，ミシシッピー (1913-19) の教会で伝道牧会を続け，1919年にはニューオリーンズのバプテスト聖書神学校で教会史教授兼図書館長として働きながら1925年に永眠している[29]。

彼は次の著作をなしている。*Immersion : the Act of Christian Baptism* (1891), *Close Communion or Baptism as Prerequisite to the Lord's Supper* (1892), *American or Rome, Which?* (1895), *Did They Dip?* (1896), *Baptist History Vindicated* (1899), *The Form of Baptism in Scripture and Arts* (1907), *A History of the Baptists* (2 vols, 1922-26), *A History of the Baptists in Lovisiana* (1923),そして *Trial of Jesus* (1924) である。

(2) J.T.クリスチャンの著作分析

上記の著作の中でクリスチャンによるバプテスト派の歴史に関するものは三冊である。それらは *Did They Dip?* (1896), *Baptist History Vindicated* (1899),そして *A History of the Baptists* (Vol. I, 1922; Vol. II, 1926) であり，論争に直接関わったのは初めの二冊であるが，三冊目の『バプテスト史』も「キッフィン原稿」と「ジェシーの記録」に触れているので，これらを取り上げて検討したい。

Did They Dip? この書はフィトシットの *A Question in Baptist History* への攻撃と批判が目的で書かれた12章構成の書物であるが，フィトシットが新しく発見した文献が妥当性と信用性に欠けていることを論議しようと意図したものである。

多くの資料を用いながらクリスチャンは八つの問題点を提起する。(1)フィトシットは新説紹介者とは言えない。なぜなら英国人クエーカー教徒，ロバ

点である[27]。

W. O. カーバーは更に次のように語る。

> フィトシットは何を成し遂げたのか？教派神学校が体験した悲劇の中でもたらされたのは何であったのか？……第一に言えることは，彼が南部バプテストの人々の中に惹起し，促進した概念，即ち学問はより科学的であり，客観的であり，より広範囲な歴史的視点に立ってなされなければならないということの重要性を次第に〔人々の意識に〕増大させていったことである。私たちが学問に対する自覚を深めたのは，歴史研究は護教派的或は弁証学的な目的のために資料を探すのではなく，真理とキリスト教の前進のために実質的事実を用いるということである。
>
> 第二に，フィトシットはイングランドの英語をしゃべるバプテストの起源とヨーロッパ大陸のアナバプテストの起源との間に存在する明白な区別を示したことであり，そこには起源における相違があり，教派的一致や教理的合意或は組織的統一が不可能であることを明白にしたことである[28]。

フィトシットの南部バプテストへの貢献に関しては，彼の他の著作も挙げる必要があるであろう。紙面の関係で著作主題だけ記しておこう。*The Relation of Baptists to Culture* (1872), *The Rise of Infant Baptism* (1878), *The History of Communion Among Baptists* (1880), *The Origin of the Discipline of Christ* (1880), *The Life and Times of Judge Caleb Wallace* (1880), と *Genealogy of Jefferson Davis* (1908) である。

2. John Tyler Christian (1854-1925)

(1) J. T. クリスチャン略伝

ジョンT. クリスチャンはケンタッキー州レキシントンに1854年に生れている。同州のラッセルヴィルのベテル大学に学び，B. A. を1876年，M. A. を1882年，D. D.〔神学博士号〕を1888年に取得している。大学院終了後ヨーロッパに7回旅し，1889年にはルイジアナのキーチ大学からLL. D. を授与されている。バプテスト派の牧師として按手礼を受けたのは1876年であり，

おける問題点』)を出版した。この書物は更に強い反発を惹き起した。この書において彼が指摘したのは，バプテスト派の起源について言及しているThomas Crosby, Isaac Bachus, Joseph Ivimey, そしてDavid Benedictはオランダ，アムステルダムのメノナイト教会内資料保管室に保存されている〔バプテスト派の起源に深く関わったスマイス，ヘルウィスそしてマートンについて語っている〕重要文献を入手・検討せずに記述しているという事実である[23]。そしてフィトシットはバプテスト派による浸礼がイングランドで導入されたのは1641年であることを主張し，それを裏づける資料こそ『ジェシーの記録』と『キッフィン原稿』であると説いたのである。即ちイングランドのヘンリー・ジェシーが牧する教会から離脱した人々とスピルスバリーの牧会する教会の人々が合流し，聖書の示す正しいバプテスマ形式は浸(しず)めであるという確信に至り，オランダのリンズバーグにブラントを派遣して，浸礼を研究させ，彼の帰国を待って1641年に浸礼を行い，バプテスト教会を形成したと述べたのである[24]。

バプテスト教会の重要な主張として守られてきた浸礼様式は1641年に始まったのであるから，それ以前のジョン・スマイスの流れを汲むジェネラル(アルミニウス主義或は普遍贖罪主義)・バプテストは滴礼を行っていたのであるからアナバプテストと呼ばれるべきだとフィトシットは説いたのである[25]。

(3) フィトシットの南部バプテストへの意義

フィトシットはグレイヴス一派の猛攻撃と批判をあびて，1899年に無念にも神学校教授辞任へと追い込まれ，1年間の休暇研究の後に，ヴァージニアのリッチモンド大学の哲学教授として招かれ，そこで1911年に死亡する迄教え続けた[26]。

フィトシットの南部バプテストへの影響と貢献に関して，E.B.ポラードは三点を強調している。第一は，彼が南部バプテストの持つ強さと弱さについてより良く理解させたこと，第二は南部バプテストが歴史における主観的信念と歴史に関する客観的解釈の相違をより一層明白に認識するように仕向けたこと，第三に彼が歴史研究における科学的方法論を推進したこと，の三

ているが，その中で彼はフィトシットが①疲れを知らぬ情熱と完ぺき主義をもって仕事に打ち込んだこと，②独創的研究家としての新鮮さと情熱をもって学生たちの前に現われたこと，③彼の歴史研究はドイツに2年間学んだ影響を受けており，歴史的真理探求の方法はドイツ的様式を反映していたこと，などを述べている[19]。

フィトシットは1880年の夏に2ケ月間をイングランドで過し，主として英国美術館とオックスフォード大学とケンブリッジ大学図書館で英国バプテスト史の貴重な文献に関する研究を行い，帰国後に匿名で学術雑誌 *The Independent* に論文を投稿し，その中に「英国バプテスト派が1641年以前に浸礼〔全身を水に沈める形式のバプテスマ〕を実践したという証拠はなく，また〔プロヴィデンス居住地の創立者〕ロジャー・ウィリアムズが1639年にバプテスマを受けた時，一般に信じられているような浸礼ではなく，恐らく滴礼であったろう」[20]と述べたのである。これは明らかにオーチャードやグレイヴスの見解を否定するものであった。

1895年フィトシットは学術雑誌 *Johnson's Cyclopedia* に「バプテスト派」と題して論文を発表した。この論文には *The Indendent* で述べられた同見解が記述されていた[21]。この論文は第1次原資料を厳密に調べることなく記述された歴史書によって形成された主観的信念，特にランドマーク主義の理論そのものの根拠を切り崩し，安全性を脅かすものであったので，ランドマーク主義者からの攻撃が始まり，いわゆる「フィトシット論争」と呼ばれる議論が紙面で展開されることになる。

その口火を切ったのが1896年夏の *Western Recorder* であり，その紙面においてフィトシットはボーリングリーンで行われたケンタッキー教会連合総会において，イートンの批判・攻撃に対してフィトシットは自己見解の正当性を立証する歴史文献を用いて答弁した主旨がカーバーによって書かれている[22]。

(2) フィトシットの歴史見解

フィトシットは1896年に *A Question in Baptist History*（『バプテスト史に

えた歴史記述の重要性を訴えて、バプテスト信者の意識を覚醒させる役割を果した。しかしフィトシットはランドマーク陣営から猛攻撃を受けることになってしまう。J.T.クリスチャンが攻撃の旗頭であったが，幸いにも有能な歴史学者G.A.ロフトンが敢然と反論し，フィトシットを弁護することになった。この項ではこれら三人の歴史家たちの主張点を浮き彫りにしてみよう。

1．William Heth Whitsitt （1841-1911）

(1) W.H.フィトシット略伝

W.H.フィトシットはテネシー州ナッシュヴィルに1841年11月25日に生れている。祖父のジェームス・フィトシットはテネシー中部の教会の牧師であった。ウィリアムはミルクリーク・アカデミー，マウント・ジュリエット・アカデミー，そしてテネシー州ジャクソン市にあるユニオン大学で学んでいる。1861年に卒業後，按手礼を受けて連邦軍の従軍牧師として南北戦争の間働いた[15]。

終戦後ヴァージニア大学に復学し(1866年)，その後，南部バプテスト神学校に学び(1867-68)，神学校のジョンA.ブローダス博士の助言と励ましに従って，ライプツィッヒとベルリン大学で2年間学びを続けた[16]。1872年ジョージア州アルバニー教会で牧師として働いていた時に，当時南カロライナのグリーンヴィルに建っていたサザン・バプテスト神学校で教会史を教えるよう要請されて教壇に立った[17]。神学校教授としてのフィトシットを回想して，宣教学教授W.O.カーバーは次のように記述している。

> フィトシットは思考深遠で独創的，かつ創造的意欲の旺盛な思索家であった。……〔また〕彼は会合においては客観的に判断し，新しいアイデアを尊び，知的構造や労働形態における有益な変化を喜んで推進しようとした[18]。

またE.B.ポラードは「フィトシットの生涯と業績」と題して論文を書い

であると主張してきた。もしこのバプテストの主張が真実であるならば，彼らはその主張が古代からの証拠に基づいていることを示すべきであり，それが可能でなければならない。……この書物は全てのクリスチャンが知るべき歴史の事実を適切な形で提示するために企画された[13]。

序文の主張にもかかわらず，フォードの方法と同じようにレイはバプテストの群の起源を使徒時代にまでさかのぼらせてゆく。即ちアメリカ・バプテスト→イギリス・バプテスト→ドイツ・バプテスト→ワルドー派→ノヴァティアヌス派→使徒たちへと至る展開に非歴史性を露呈する。結論の中でレイは大胆にも次のように語る。

……バプテストの継承の鎖は切れることはなかった。……バプテストは勇気をもってイエス・キリストこそ教派の創立者であり，頭であると主張する。そして連続してきた継承は使徒時代から現代にまで至っているのである[14]。

レイの『バプテスト史ハンドブック』には David Benedict, J. L. Mosheim, T. J. Iones, G. H. Orchard の作品がバプテスト継承説を実証する信頼に価する重要文献として用いられており，レイの歴史記述の方法はオーチャードやフォードと同様であり，それを超えるものではない。従って，彼も19世紀の無批判的，非科学的歴史学者として評価されることは避けられないのである。この書物は1912年に改訂されるのであるが，方法論とその内容は初版本と同様で変わりはない。

II．W. H. Whitsitt, J. T. Christian そして G. A. Lofton

19世紀の終りに近づいて，歴史学研究にドイツ流の客観的史実性に基づく記述方法を採択した歴史家がバプテスト派の中から現われた。その人物はフィトシット（William Heth Whitsitt）である。彼は1896年に *A Question in Baptist History*（『バプテスト史における問題点』）を出版して，教派的偏見を超

が，序文にはグレイヴスが言葉を寄せて，フォードの作品は「時宜にかなったものであり，凝縮した形体のこの書は歴史的事実に立っているゆえに信じるに足るものであり，多数の読者に歓迎されるであろう」[11]と推奨した。オーチャードの『外国バプテスト略史』より遅れること5年であることと，またグレイヴスの継承説への関心が高まりつつあったことから，確かに良い時期に出版されたと言える。

フォードは *Western Recorder*, *Missouri Baptists* そして *Christian Repository* の編集者であったから，ジャーナリスト的文体でヴァージニアのバプテストから書き始めて，バプテストの源流を初代教会に至らしめる。キリスト教史上に出現したカトリック教会への非服従グループ(セクト)を鎖のようにつないでバプテストの群とする手法は全くオーチャードと同じである。83箇所に付された註の短い説明から明らかにされる参考文献は殆ど第2次間接資料である。一例を挙げるならば，7世紀に出現してその教えが善悪二神論を説いたゆえに異端性を保有するものとして迫害され，また9世紀にも皇帝から断圧されたパウロ派が，Mosheim の書いた *History of Anabaptists* の中で，バプテスト派と同一視されているゆえに，フォードはそのまま信じて疑わず，歴史的事実性を調査せずに，長々と自分の書物に引用しているのである。これは歴史学者として慎まねばならない記述手法を暴露している悪い手本と言える。

(4) D. B. Ray (1830-1922)

バプテスト派の牧師であった David Burcham Ray は1870年に *Baptist Succession : A Handbook of Baptist History* (『バプテストの継承：バプテスト史ハンドブック』)を出版した。フォードより10年後のことである。序文においてレイは次のように書いている。

> バプテストたちは声を一つにして背教の道をたどったローマとの結合を拒絶してきた。そして，バプテストの起源はイエス・キリストと使徒たちの教会

グレイヴスはオーチャードの見解に共鳴し，バプテスト教会は洗礼者ヨハネ以来，歴史を通じて存続したことを主張し，「バプテスト継承説」を彼が後に展開したランドマーク運動の中核に据えたのである。ランドマーク運動とはJ.R.グレイヴスによって1850年以降に強力に推進された運動であり，今なおアメリカ南部のバプテスト諸教会に影響の痕跡を残しているものである。

「バプテスト教会は幼児洗礼を肯定する牧師を教会の講壇に招くべきか」という質問に答えて書いたJ.M.ペンデルトンの小論文を一冊の本にまとめて，グレイヴスは *An Old Landmark Rest*（『置き直された境界標』）と題して出版した。ランドマーク主義という語はこの題名に由来しているのである。1851年にグレイヴスと仲間たちはテネシー州のコットングローブに集い，聖書的バプテスト以外の教会牧師及び礼典の有効性を否定する大胆な声明を発表した。

それに続く数年の間に，グレイヴスはランドマーク主義の教理の深化と明確化に努め，精力的に説教を通し，また機関誌『テネシー・バプテスト』を通じて宣伝，教化した結果，1880年までにバプテスト派の多くの教会がグレイヴスの見解に共鳴し，支持するようになったのである[9]。パターソン教授は次のように述べている。

> バプテスト継承説はグレイヴスの教会論と見事に調和し，彼の教会論にある種の権威さえ与えた。それゆえに，バプテスト継承説は彼の教会論を中心とするランドマーク主義に顕著な色彩を添えたのである。ランドマーク主義運動が盛んになった頃，バプテスト継承説を主張，弁護する歴史家たちが急増した[10]。（グレイヴスの教会論については，この論文の註10）の中で述べている。）

(3) S. H. Ford (1819-1905)

Samuel Howard Ford はルイヴィル，メンフィス，セントルイスで牧師として働きながら，1860年に *The Origin of the Baptists*（『バプテスト派の起源』）を出版して，継承説の見解を公けにした。僅か175頁の歴史書であった

幼児洗礼反対と信仰者のバプテスマという視点からのみ考察して，歴史的誕生経緯の異なる諸セクトを鎖のようにつなぎ合わせて，歴史的連続性ありと説くことは明らかに誤った見解であり，歴史的信憑性を欠くことは言うまでもない。オーチャードの著作を分析する限りでは，中心の問題点は彼自身が偏見をもっていることに気づいていないことにある。ゆえに歴史的記述に信頼性を欠く書物を信頼性の高い書物と勝手に断定し，それらの書物から多数引用して，自説の正当性の裏付けに用いようとするのである。バプテスト派に属さない歴史学者では Peter Allix，J. L. Mosheim と William Wall を，バプテスト派の歴史家では Henry D'Anvers，Joseph Ivimey，William Jones，Robert Robinson を重視して，彼らの著作から多数の引用がなされる。しかし，それらの著作の中には歴史的に妥当とは言えない記述内容が多く含まれていることを厳密に検証せずに，第1次原資料にまで立ち帰って忠実に調べることなく，単純に第2次関接資料を信頼性の高い記述として引用するのであるが，彼の巧妙な表現力により，読者は不思議に説得されてしまうのである。

パターソン教授によると Henry D'Anvers，*A Treatise on Baptism* (London, 1674) から40回以上，T. G. Jones，*The Baptists* (Valley Forge, 1860) から76回，J. L. Mosheim，*An Ecclesiastical History* (Charleston, 1811) から107回，Robert Robinson，*Ecclesiastical Researches* (Cambridge, 1792) から143回の引用あるいは言及があり，オーチャードの記述における第2次資料への依存度が高いことが顕著であること。そればかりではなく，都合の良いところだけが引用され，都合の悪いところは省くという悪い見本のような歴史書であることが指摘される[8]。

(2) J. R. Graves (1820-1893)

このような欠陥があるにもかかわらず，オーチャードの『外国バテスト略史』は，J.R.グレイヴスの努力によって1855年にアメリカで出版され，彼がこの書を高く推奨し，国内に広く販売したので，アメリカのバプテスト信者に大きな影響を与えることになってしまうのである。

1．C. H. Orchard と J. R. Graves

第一のグループに属する歴史家たちには18世紀イギリスではトーマス・クロスビー，ロバート・ロビンソン[5]，19世紀イギリスではジョセフ・アイヴィメイ，アダム・テイラー，J.M.クランプ，G.H.オーチャード；19世紀アメリカではディヴィッド・ベネディクト，J.R.グレイヴス，S.H.フォード，D.B.レイ等がおり，彼らは，バプテストという群が歴史上連続的に原始教会以来存続してきたという見解を主張する。通称「バプテスト継承説」と呼ばれるこの見解について研究した元サザン・バプテスト神学校の教会史家W.M.パターソン教授は，この見解の種子はイングランドの Crosby, Robinson によって播かれたが，「新しい概念の形成とその普及に努めた著名な人物は，英国バプテスト派の牧師であり，歴史家でもあった G. H. Orchard にほかならない」[6]と述べる。従って，ここではオーチャードについてまず言及しておかねばならない。

(1) G. H. Orchard (1796-1861)

オーチャードは1838年に *A Concise History of Foreign Baptists*（『外国バプテスト略史』）を出版したが，その中で典型的な「バプテスト継承説」を展開する。オーチャードによると，洗礼者ヨハネこそヨルダン川で信仰によるバプテスマを授けた最初のバプテストである。信仰によるバプテスマはイエスの弟子たちに受け継がれ，それからパウロに，そして初代教会の教父たちに継承されたと考える。このバプテスマはその後，継続的に①モンタヌス派（2C），②ノヴァティアヌス派（3C），③ドナトゥス派（4C），④パウロ派（7C），⑤ワルドー派（13C），⑥フス派（15C），⑦アナバプテスト派（16C），それからバプテスト派（17C），と歴史的に連続して継承されて現在に至ると考える。彼はメノナイトをメノナイト・バプテストと呼び，彼らこそワルドー派の継承者と呼ぶ[7]。オーチャードの著述全体が自覚的信仰者のバプテスマという点をめぐって展開されており，キリスト教史を通して信仰者洗礼を実践した分派的セクトをバプテスト派，幼児洗礼を実践したセクトを非バプテスト派と単純に二分化してしまうのである。

大学の『紀要』に載せた論文,「アメリカ宗教の底流に在るもの（Ⅰ）～第1次から第3次信仰大復興の研究と分析～」(1998年3月）と,「その（II）～第4次信仰大復興の研究と分析～」(1998年2月)の中で考察したリバイバルの副産物として生じたアメリカ・プロテスタント宗教の保守性が，具体的にはバプテストという教派において，特に歴史理解において，どのような形で現われたのかという事実を明らかにするという研究の一測面をもっている。

Ⅰ．継承主義歴史家たちとランドマーク主義

アメリカ・キリスト教の発展における特異な現象の一つに，18，19世紀に生じた信仰覚醒がある[1]。信仰復興（リバイバル）とも呼ばれる第一の波は1740年頃にニューイングランド，中部，南部の三植民地に訪れた。第二の波は1795年頃に押し寄せ，1835年頃迄続いた。この信仰復興の波は東部，西部，南部諸州の諸教会にまで波及し，バプテスト教会の信徒たちも信仰覚醒により，1800年から1830年の間にバプテスト派の信徒数は増加の一途をたどり，教派として第三位になり，1850年迄にメソジスト派に次ぐ第二位の信徒数にまで増加している[2]。

バプテスト派の信徒数が増すにつれて，バプテスト教会の起源とその歴史的経緯に関する関心が高まり，その結果，バプテスト派の歴史書が数多く書かれるようになった。歴史文献の増加を促したもう一つの背景には，幼児洗礼擁護派からのバプテストの主張する幼児洗礼反対への批判，攻撃に反論して書くという護教派的意図もあったことは事実である[3]。

19世紀アメリカにおけるバプテスト派の歴史家たちは二つのグループに分類することができる。第一は歴史を書く際に主として第2次資料に基づいて書いたために，歴史内容に正確さを欠くグループであり，第二は19世紀初頭にレオポルド・フォン・ランケが提唱した歴史記述における科学的厳密性を期する批判的方法に基づいて第1次原資料を重んじて歴史書を書いたグループである[4]。まず第一のグループから考察してみよう。

19世紀アメリカにおける バプテスト派の歴史文献について

斎　藤　剛　毅

序

この論文は19世紀アメリカにおけるバプテスト派の歴史家と彼らの歴史的著作に焦点を合わせながら，後のバプテスト信徒たちのアイデンティティ形成に影響を与えた歴史観及び貴重な歴史的文献を研究することを目的とする。第Ⅰ項ではS.H.フォードとD.B.レイを取り扱い，彼らの歴史的見解がいかにG.H.オーチャードとJ.R.グレイヴスの「バプテスト継承主義」の影響を受けたかを立証する。従って，オーチャードの作品分析に重点を置く。

第II項ではW.H.フィトシット，J.T.クリスチャン，そしてG.A.ロフトンという三人の激論を交した歴史家たちを取り上げ，彼らが『ジェシーの記録』と『キッフィン原稿』の歴史的信憑性をめぐってどのような議論を闘わせたかを，フィトシットの論考に対するクリスチャンの批判，その批判へのロフトンの反論という順序で考察する。第III項ではH.C.ヴェダーとA.H.ニューマンという著名な19世紀後半の歴史家たちを研究の対象とするが，彼らは「バプテスト継承主義」の見解を否定して，歴史的論点から「バプテスト派の歴史」をどのように書き上げているかを検討する。

この論文は拙著『バプテスト教会の起源と問題点』第一部の第1章「バプテスト派の起源に関する歴史家たちの諸見解」に書かれた内容の補足的性格をもつものである。また筆者が福岡女学院大学研究所の『人文学研究』及び